



ことわざの話

古くから“子どもは親の後ろ姿を見て育つ”と言われ、一般に父親の影響が大きく反映されるようである。昭和5年生まれの私は5人兄弟の末っ子で、2人の兄は幼少時に、また11歳年長の姉は南洋のパラオで熱帯病に罹り昭和17年に24歳で亡くなった。不幸は重なるものなのか、その翌年の昭和18年11月には父親が喉頭がんのため60歳の若さで他界した。当時は大東亜戦争真っただ中で特別な医療も無く悔めな闘病であったと思われた。原因は刻みタバコにあり、毎日のように煙管の掃除をしていた父の姿が忘れられない。そのため私は禁煙を続けてきた。

その当時私は旧制丸亀中学校1年生のまだ少年であって、その後は母と2人で今様の母子家庭となり、戦中戦後の厳しい環境での苦難の生活が続いた。こんな事情があり私が父親の姿を見て育ったのは生後13年間と短く、人間形成にとって大切な時期を母親一人に委ねる結果となった。しかし、気丈夫な母のお陰で苦難であったが現在の自分があるものと感謝している。その母は昭和51年に89歳の生涯を閉じ、私は45年間母とも一緒に生活し、母の姿を見て育ったと言える。“父母の恩は山よりも高く、海よりも深し”ということわざがあり、親の有難さを忘れてはならないと思ったが、その反面“親の心子知らず”で過ごした面もあったと反省している。

その後の人生では家族、職業、社会環境の変遷などに順応していく上で、私たちは色々と学び、体験し改善するなどの対策を実行してきたと思う。その過程で知恵や体験を糧として社会の荒波を乗り越える指針となったものに“ことわざ”がある。私は以前から「故事、ことわざ」に興味をもち、これを実生活の中で参考にしてきたと思う。

インターネットの資料によると、普段何気ない会話のなかにも色々なことわざが使われているもので、日本では平安時代すでにことわざがあったという記録が残されていて、平安時代初期に世俗諺文(せぞくげんもん)ということわざ辞典が出版されていたらしい。私たちが知っていることわざの多くは庶民の生活のなかで生み出された教訓で、しかもそれは実体験がもとになっているものである。

江戸時代の中頃になると中国の古典が伝わってきて、その中国古典と日本の古くからあったことわざが混ざり合い、狂歌と呼ばれる大衆文芸が誕生した。今でいう流行語に似たもので狂歌師(放送作家、コピーライターのような人)によって作られ、江戸時代の末には江戸や上方の人々にとって最大の娯楽であったという。

現在様々なことわざ辞典が出ているが、その元祖とされるものは諺語(げんご)大辞典と言われ明治時代に藤井乙男が書いたもので、日本初のことわざ専門辞典とされる。

また、長い歴史をもつ中国で作られたことわざは故事成語といわれている。ここで“ことわざ”の端的な説明をすると「鋭い風刺や教訓・知識などを含んだ、世代から世代へと言い伝えられてきた簡潔な言葉のことである。李巖(りげん)ともいう。観察と経験そして知識の共有によって、長い時間をかけて形成されたものである。その多くは簡潔で覚えやすく、言い得て妙であり、ある一面の真実を鋭く言い当てている。そのため、詳細な説明の代わりとして、あるいは、説明や主張に説得力を持たせる効果的手段として用いられることが多い」となる。

このようにことわざはこの国にもあり、民族の生活に根差した文化で、多様な人の生きるための知恵が内蔵されていると言われる。そこで我が国でしばしば用いられている“ことわざ”からいくつかを抜粋してみたい。

○ 過ぎたるは尚及ばざるが如し；過ぎることは不足していると同じようによくないもので、過不足なくほどほどが良いとされる。

○ 老少不定；年寄りが必ずしも先に死ぬとは限らないし、若者が長生きするとも限らず、人の寿命は予測できないし、はかないものであるということ。

○ 百聞は一見に如かず；話を何回も聞くよりも自分の目で一度実際に確かめて見ることが大切であるということ。

○ 病は口より入り、禍は口より出るもの；病気は飲食が原因で起こり易く、災難は自分の話す言葉が原因で起こるものだとすることで飲食と言葉には注意したい。

○ 目は口ほどに物を言う；感情をこめた目の動きは、自分の気持ちを相手に伝える。心は目に現れるため心を偽ることはできない意味に使われる。

○ 楽あれば苦あり；楽は苦の種、苦は楽の種 と言われ苦楽は相伴うものである。

○ 天は自ら助くるものを助く；天は他人の力に頼らず自立して努力する者を味方にするものである。

○ 失敗は成功の基；物事をしくじっても、その原因を考えて反省し、同じ失敗を繰り返さないようにすれば、成功の道が開けるものである。

○ 嘘も方便；嘘をつくのは良くないが、物事を円滑に運ぶためには、時と場合によっては必要なことである。

○ 因果応報；善い行いをすれば良い報いがあり、悪い行いをすれば悪い報いがあること。もとは仏教語で因果は原因と結果であることに応じた報いの意。

○ そろそろ“老いては子に従え”の言葉が聞こえてきそうで、年をとったら意地をはずらずに、何事も子供の言うことに従うことが利口な年寄りであると反省している。

